

瓦が語る古代の文明開化

立命館大学文学部

木 立 雅 朗

はじめに

末松廃寺は7世紀後半、660～670年代頃に造営されました。北陸でもっとも古い寺院のひとつです。誰が、なぜ、末松に古い寺院を建てたのでしょうか。ここでは、瓦や仏教を鍵にして、ひとつの仮説を提示して見たいと思います。

1. 古代の文明開化

国際関係と文明開化

「古代」の幕開けは、古墳時代の中頃にはじまりました。倭の五王は中国に使者を次々と送り、さまざまな制度や文化を積極的に導入しはじめました。事実上、中国を中心とした東アジア社会へ積極的にデビューしたのです。その頃、大陸から海を隔てた倭の社会も、中国や朝鮮半島の情勢とは無関係でいられない国際情勢が作られ、その影響を受け始めたためでした。

古墳時代の終わり頃になると、中国に巨大な国家・隋が誕生し、国際情勢がさらに厳しくなりました。中国では引き続いて唐が起こり、対外圧力は増す一方になりました。そのような国際情勢の変化が、「倭」の社会を変え、国家形成や整備に大きな影響を与えました。

明治維新と同じように、古代でも国際関係の大きな変動とともに「文明開化」が訪れました。明治維新と共通するのは、巨大な国際的圧力に対抗するため、相手の力や原理を利用して乗り切ろうとする方法をとったことです。中国や朝鮮半島諸国の制度や文化を積極的に導入したのはそのためです。単なる流行ではありません。

古代と近代の文明開化の違い

なお、古代にはたくさんの人々が大陸・半島から移住してきたことがわかっています。文献史料にも多くの「帰化人」が記録されていますし、人骨を研究する形質人類学者も大量の移住者があったと想定しています。意外なことですが、文献史料の研究でも形質人類学の研究でも、奈良・平安時代の倭人は移住者系が過半数を超えていたと想定しています。制度や文化だけを模倣したのではありませんから、近代以上に本格的な、「人」を含めた制度・文化の導入があったと考えられるでしょう。その点は古代と近代の大きな違いです。また、明治維新はごく短期間のことでしたが、古代の文明開化は古墳時代中頃から7世紀末まで、おおよそ300年ほど続いた、長くて紆余曲折のある変革でした。

2. 仏教の導入と古代寺院

仏教公伝

仏教は古墳時代の後期、538年（もしくは552年）、百済の聖明王から釈迦仏像と経典を送られ、公式に伝えられました。当時、百済は高句麗や新羅と敵対関係にあり、情勢は逼迫しつつありました。そのため、百済は倭と友好関係を結ぶために仏教を伝えたのですが、その聖明王

も554年には新羅との戦いで戦死しました。

「私的」仏教

百済から公式に仏教が伝えられる以前から、実際には「私的」に仏教が伝えられていたと考えられます。当時、すでに朝鮮半島から多くの人々が移住していました。それらの人々の間でも仏教が普及していたと考えられるからです。古墳時代中期の変化のなかにも、そうした痕跡が認められます。新しい横穴式石室が導入され、渡来系の文物が数多く副葬されるようになりました。同じように「古墳時代」と呼んでいます。実際には随分と大きな変革があったと思います。

しかし、「私的」な仏教が導入された当初は「寺院」と呼べるような建築物はなかったと想定されます。考古学的な証拠も少なく、今のところ、「仏教導入」を示す確証は発見されていません。また、百済から仏教が公式に伝えられたからと言って、即座に寺院が建立されたわけではありません。「崇仏論争」をへて587年に蘇我氏が物部氏を倒してから、本格的な古代寺院が建築されたと考えられます。現在のところ、最古の古代寺院は596年に完成した飛鳥寺です。「崇仏論争」に決着が着く直前の585年、蘇我馬子が大野丘に塔を建てたと記録されていますが、この塔は今のところ未発見です。

古代寺院と仏器としての土器

飛鳥寺が建立されてから50年以上の間、古代寺院の数はそれほど増えませんでした。飛鳥地方を中心に増加したのですが、それ以外の地方ではごくわずかし確認されていません。古代寺院が建てられた証拠は瓦や礎石ですが、飛鳥地方以外では極めて少なく、北陸でも確実な証拠はまだ発見されていません。ただし、金沢市や七尾市でこのころに遡る可能性がある瓦が出土しています。また、小松市でも瓦を模倣した可能性のある「瓦もどき」の須恵器が発見されています。古墳時代には高句麗の使節が加賀に渡来してきたという記録もありますから、倭の中心を介さずに、仏教を導入していた可能性もあります。

飛鳥寺が建立された頃、倭の広い範囲で食器の形が大きく変化しました。金属器、あるいは仏器を模倣した形に変化したのです。はっきりとした瓦や礎石は発見されていませんが、仏に添え得る器に変化したのですから、当然、仏教も本格的に導入されたと考えられます。北陸でも広い範囲で仏器模倣の食器が普及しました。これを仏教の普及と考えてよいなら、北陸も飛鳥寺建立とほぼ同時に仏教の本格的な導入段階に入ったと言えるでしょう。

ここで大切なのは、仏教はインド・中国・朝鮮を経て渡来した国際的宗教だったことです。世界各地での変容を通じて、「信仰」としてだけでなく、「支配原理」としても重要な役割を果たしました。在来の倭のアニミズム的な「信仰」や「宗教」は、世界宗教として完成していた仏教の前には未熟なものでしかありませんでした。「神道」は仏教の影響を受けてはじめて整備されていきます。神社建築も同様で、寺院が建立されるようになってはじめて神社が作られたと考えられています。一般的には仏教が導入される以前に神道や神社があったと考えられているでしょうが、実は逆なのです。「ホトケ」は「カミ」より遅れて倭にやってきましたが、「カミ」を束ねる最高神として位置づけられたようです。

表1 仏教関係略年表

西暦	国際的な出来事	倭の仏教関連の出来事
399	倭、新羅に侵入し、新羅が高句麗に救援を要請する。	
400	高句麗、兵を新羅に送り倭を撃退する。	
404	倭、もとの帯方郡の地域に出兵。高句麗に撃退される。	
421	倭王讃、宋に朝貢	
425	倭王讃、宋に朝貢	
430	倭王讃(か)、宋に朝貢	
438	倭王珍、宋に朝貢	
443	倭王済、宋に朝貢	
451	倭王済、宋に朝貢	
460	倭王済(か)、宋に朝貢	
462	倭王興、宋に朝貢	
477	倭王武、宋に朝貢	
478	倭王武、宋に朝貢	
479	倭王武、南齊に朝貢	
502	倭王武、梁に朝貢	
507	継体天皇即位	
527	筑紫国造磐井が新羅と通じ「任那救援軍」派遣を阻む。	
538	(もしくは552年)	百済の聖明王、仏像と経論を倭政権に送る(仏教公伝)
554	百済の聖明王、新羅との戦いで戦死。	
570	高句麗の使人、越国に漂着。	
574	高句麗の使人、越国に来着して上京。	
579		新羅、調と仏像を送る。
583		蘇我馬子、石川の宅に仏殿を作る。
585		蘇我馬子、塔を大野丘の北に建て、盛大な法会を行う。
585		物部守屋、塔・仏殿を焼き、仏像を難波の堀江に棄てる。
587		用明天皇、病のため仏教に帰依せんことを群臣に計る。
587		蘇我馬子ら、物部守屋を滅ぼす。
588		百済、仏舍利を献じ、僧・寺工・瓦博士らを贈る。
588		飛鳥寺の建立を始める。
590	隋、陳を滅ぼし、中国を統一する。	
594		崇峻天皇、厩戸皇子と蘇我馬子に詔して、三宝を興隆させる。
594		臣・連ら、競って仏舎(寺)を造る。
596		飛鳥寺完成。
607	倭、遣隋使を派遣する。	
618	煬帝殺され、李淵、唐を建てる。	
639		舒明天皇、百済大寺の建立を開始する。
645	大化の改新	
663	倭・百済軍、唐・新羅軍に白村江の戦いで破れる。	
664	筑紫に水城を築く。	
665	筑紫の大野・椽、長門に城を築く。	
667	近江遷都	
672	壬申の乱	
674	唐、新羅に出兵、失敗。	
676	唐、新羅の朝鮮半島領有を認める。	
676		諸国に金光明経・仁王経を説かせる。
679		諸寺の名を定める。
685		諸国の家毎に仏舎を造り、仏像・経を置いて礼拝供養させる。
693		仁王経を諸国で講じさせる。
694	藤原宮に遷都	金光明経を諸国におき、毎年正月に読ませる。
701	遣唐使を任命する。大宝律令を撰定。	僧尼令を大安寺で説かせる。
702		僧正・僧都・律師を任ずる。
710	平城宮に遷都	
729		金光明経を諸国に10巻ずつ頒下する。
728		仁王経を朝堂と諸国で講ずる。
737		諸国に釈迦仏像・挟侍菩薩を造らせ、大般若経を写させる。
740		皇后、一切経を写させる。
740		国ごとに法華経10部を写し、七重塔を建てさせる。
741		諸国の国分僧寺・尼寺の建立の詔がでる。
743		大仏発願
745		行基を大僧正に任ずる
749		聖武天皇、盧遮那仏の前で北面し、三宝の奴と自称する。

白鳳時代の仏教―瓦葺きと寺院―

日本最古の古代寺院は蘇我氏が建立したものでした。天皇自らが寺院を建立するようになるのは、639年、舒明天皇が百濟大寺を建立しはじめたのが最初でした。これ以後、飛鳥以外の地にも古代寺院が徐々に広まっていきます。特に爆発的に古代寺院が増加するのは、天武・持統天皇の時代（672～696年）でした。この頃の古代寺院は瓦葺き・礎石建のお堂を備えており、「瓦葺き」といえば寺院を意味していました。

緊張した国際関係

倭は663年の白村江の戦いで唐・新羅の連合軍に敗れ、国際的な緊張が最高に高まりました。唐・新羅の連合軍が直接、倭に侵入する危機を迎えたため、各地に朝鮮式山城を作り備えましたが、新羅が唐に反旗を翻したおかげでその難を逃れることができました。そのような中で壬申の乱が起こり、天武天皇が即位しましたが、緊張が最高に高まっている国際関係に対抗するため、天武天皇は矢継ぎ早にさまざまな政策を実行しました。各地の豪族に古代寺院の建立を促したのも、そのひとつでした。

この最高に国際関係が緊張した時期は「古代の文明開化」の最終的な仕上げ段階といつてよいでしょう。その仕上げは都城や律令の完成、国分寺の整備まで続きました。

2. 北陸の初期古代寺院と仏教

古代の北陸は、「コシの国」が越前・越中・越後に分割されたのち、越前国から能登・加賀が分立しました。末松廃寺が建立された頃、北陸はまだ「コシの国」でした。ちなみに加賀が越前から分立するのは平安時代になってからです。

そのため、以下では、「越前」に加賀・能登も含めて考えます。

越前の瓦と寺院

現在の福井県武生市周辺に4つ以上の古代寺院が建立されました。その中で、深草廃寺と呼ばれる寺院が最古で、近江・大津京周辺の寺院と類似した瓦の文様をもっています。深草廃寺とほぼ同時か、やや遅れて末松廃寺が建立されたと考えられます。その後、やや遅れて石川県加賀市でも4つ以上の古代寺院が建立されました。北陸では、武生市周辺と加賀市の二カ所で古代寺院が濃密に分布していますが、それ以外の地域ではせいぜいで二つ程度の寺院が散在している状況です。

意外なのことに、後に加賀の郡司として活躍した道君一族の本拠地である金沢市北部で古い寺院が確認されていません。金沢市高岡町遺跡で発見された半円形の瓦（半瓦当）が飛鳥時代に遡る可能性があります。仮にそうだったとしても、小規模なお堂にすぎなかったと想定されます。今後、さらに規模の大きな寺院が発見される可能性が残りますが、古墳時代に栄えたにも関わらず、古代寺院が根付かなかった地域があったようです。福井平野でも巨大な古墳群を作っていた旧・金津町や福井市周辺には目立った古代寺院が確認されていません。その逆に、古墳時代にはほとんど開発されていなかった土地に忽然と寺院が建立される地域もありました。末松廃寺はまさにその典型例です。

越中の瓦と寺院

越中では深草廃寺にやや遅れて富山県高岡市に御亭角廃寺が建立されます。深草廃寺の軒丸瓦とも文様が似ていますが、近年では美濃の寺院と類似していると言われています。この御亭

角廢寺の近くには後に越中国分寺が造営され、平城宮と同じ文様の軒瓦が新たに導入されています。御亭角廢寺は評（こおり）の役所に関係した寺院だったと考えられています。

北陸の初期古代寺院の展開

北陸では初期の古代寺院は、周囲に影響を与え、地域の核になったと考えられます。瓦から見ても深草廢寺系の平瓦が武生市周辺や加賀市周辺に影響を与えています。末松廢寺の軒丸瓦や平瓦も加賀市弓波廢寺などに影響を与えています。越中の御亭角廢寺の軒丸瓦や平瓦は富山県氷見市の小窪廢寺や石川県七尾市の国分廢寺に影響を与えています。いずれも周辺に古代寺院が増加していく際に影響力を持っていました。ところが、中核になったこれらの初期寺院は奈良時代まで瓦葺きが存続せず、平城宮式の軒瓦を継続的に導入した寺院は確認されていません。北陸では初期の寺院に限らず、ほとんどの古代寺院の瓦葺きが短命でした。

3. 末松廢寺の建立と古代加賀の「文明開化」

（1）末松廢寺の造営

発掘調査によって末松廢寺は法起寺式伽藍配置をとることが明らかになりました。しかし、塔の遺構は残りが悪く、状況がよくわかりませんでした。講堂も掘建柱建物以外、明確な遺構は確認できませんでした。講堂は瓦葺き・礎石建の建物はなかったと想定されます。

金堂は創建後のある段階で瓦屋根が倒壊したらしく、大量の瓦がまとまって出土しました。8世紀中葉から9世紀初め頃、金堂の基壇上に一回り小さな堂が建築されていますから、遅くとも、それ以前に金堂が倒壊していたと思われる。

（2）末松廢寺の瓦作り

軒丸瓦 末松廢寺の瓦は、二つの系譜の文様が確認されました。一つは末松廢寺でもっとも多く出土したもので、単弁8葉で周囲に二重の鋸子文が確認されます（A系統）。もう一つは、わずか一かけらしか確認されませんでした。複弁8葉のもので、周囲の文様はかけていてわかりません（B系統）。どちらの瓦もほぼ同時期のものだと想定されます。A系統は能美市湯屋窯とその周辺で焼成されました。B系統は土の違いから湯屋窯とは別の地点で製作されていたと考えられますが、その産地は不明です。

A系統の軒丸瓦は、細い弁と太い弁の二つが確認されますが、細い弁は一かけらしか確認されていませんが、直径が大きく、厚さもあることから古い可能性があります。太い弁のものは、直径を縮めるために細い弁を圧縮したのかもしれませんが。この太い弁のものは、何度も范型を彫り直して補修していることがわかりました。この范型の最終版が能美市湯屋窯で出土した軒丸瓦です。随分と范型が痛み、文様が不鮮明になっている部分がありますし、瓦当の厚さが著しく薄く華奢になっています。末松廢寺の金堂から出土した軒丸瓦のほとんどがこの范型で造られていました。

平瓦 末松廢寺から出土した平瓦の大半はA系統の平瓦で占められますが、B系統の平瓦も、ごくわずかに確認されます。

A系統の平瓦が叩き締め痕跡をそのまま残すのに対して、B系統の平瓦は叩き締め痕跡を完全に消し去っています。焼成もややA系統に比べてやや甘い傾向があります。そのため、A系統とB系統は比較的簡単に区別することができます。

A系統の平瓦は、軒丸瓦の范型の補修に合わせるようにして、技法が変化したようです。お

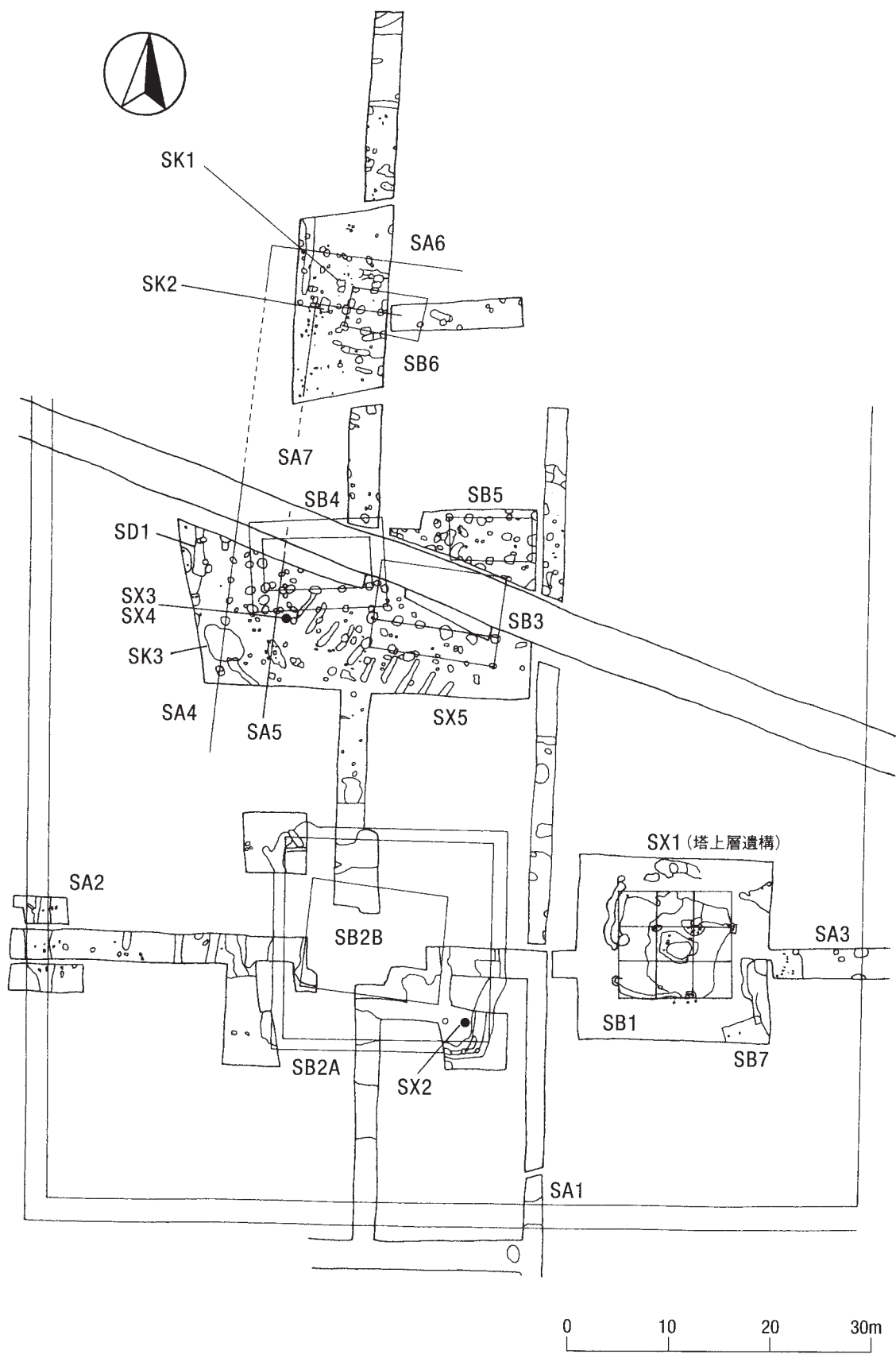


図1 発掘された末松廃寺の主要遺構配置図（報告書より）

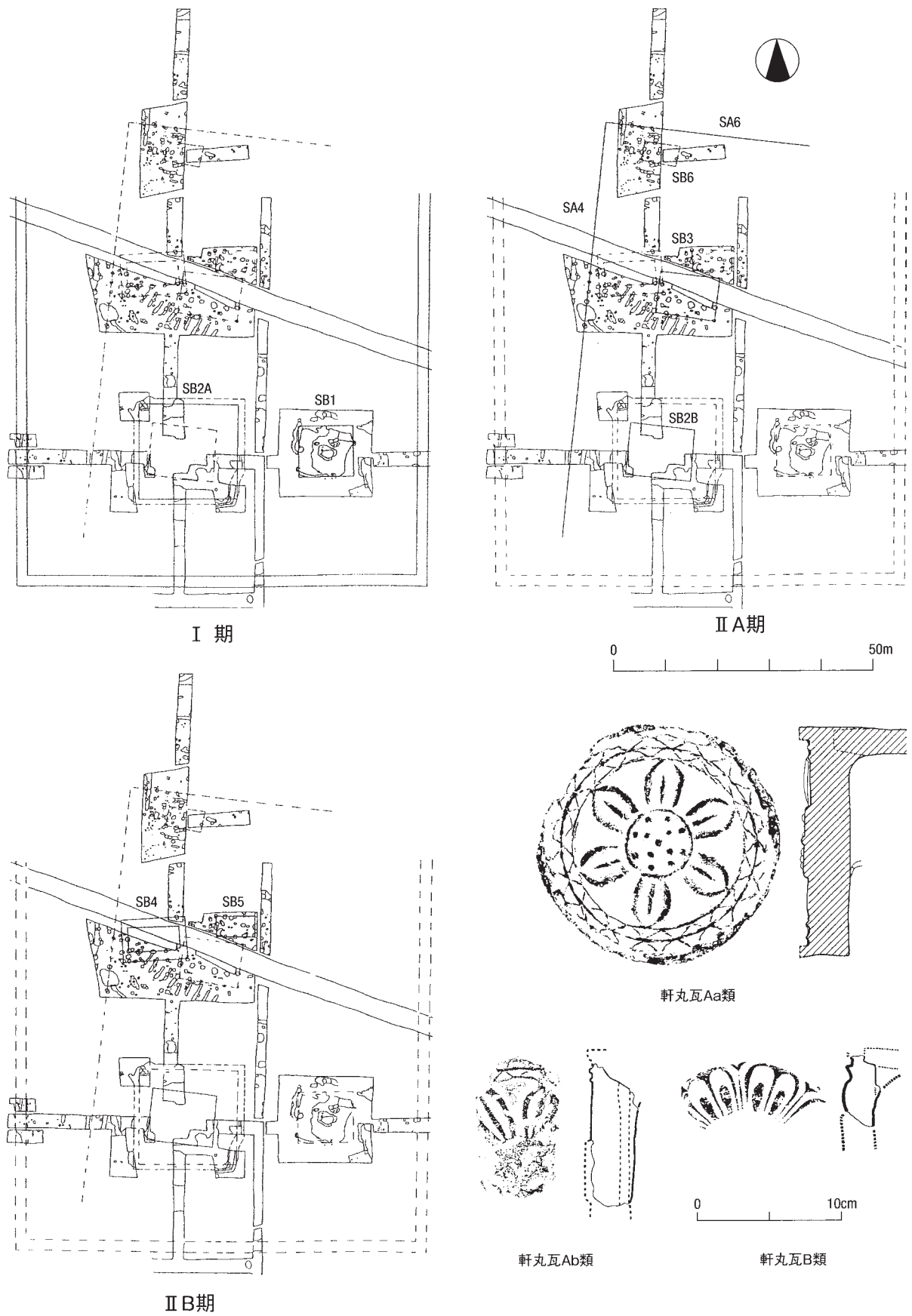


図2 末松廃寺の変遷と出土軒丸瓦（報告書吉岡論考より）

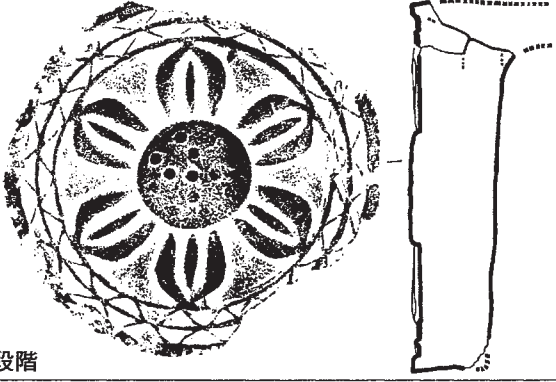
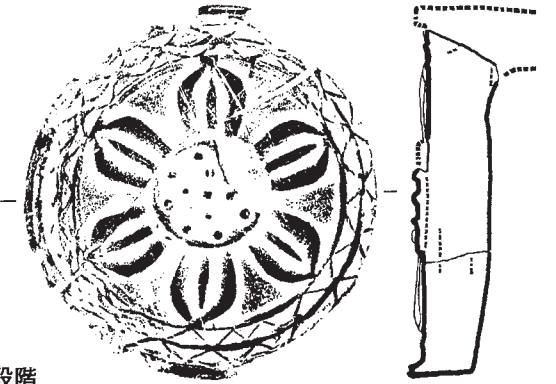
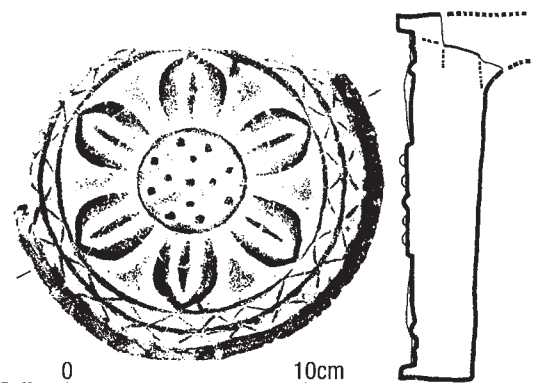
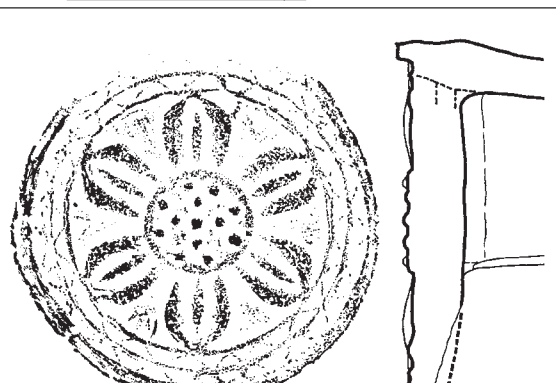
(軒丸瓦)		(共伴平・丸瓦)			
1段階		平瓦Ⅰ		丸瓦Ⅰ	
2段階					
3段階		平瓦Ⅱ類		丸瓦Ⅱ	
4段階		<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ? ?	平瓦Ⅲ	? ?	丸瓦Ⅲ

Fig.117 末松廃寺出土瓦範の変遷と平・丸瓦の供伴関係想定図
(1～3段階は末松廃寺金堂創建瓦。4段階は湯屋窯出土品)

図3 末松廃寺 A 系統軒丸瓦 (太い花卉) と平瓦の変化 (報告書より)

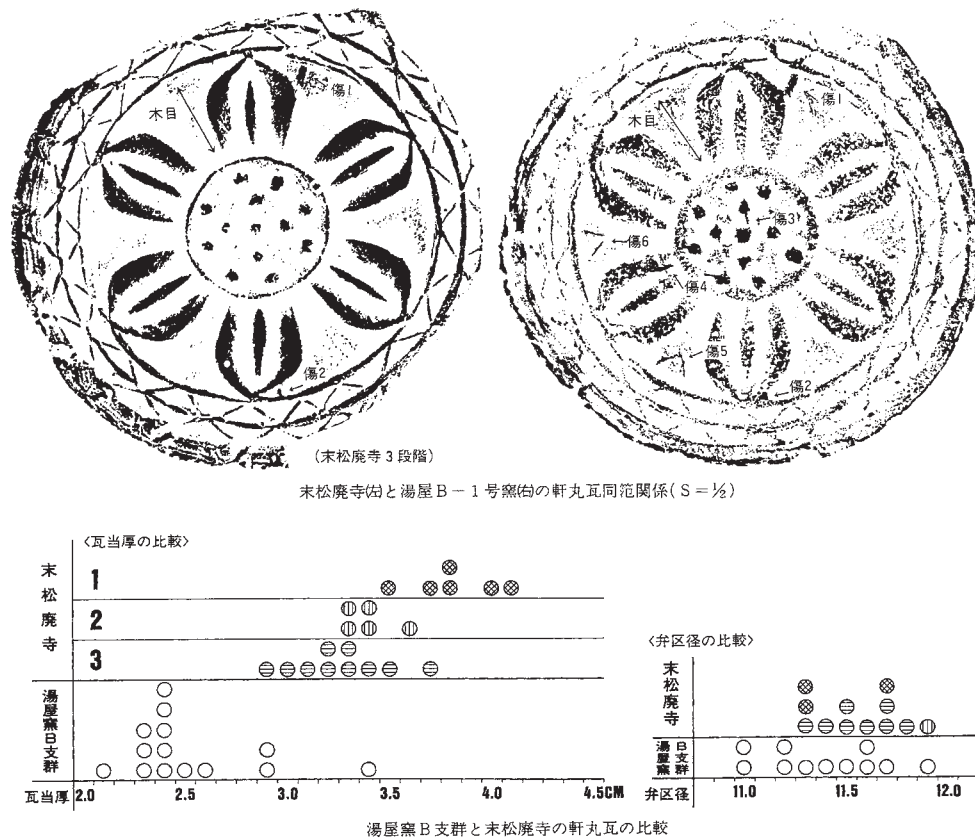


図4 末松廃寺A系統軒丸瓦(太い花卉)と能美市湯屋窯の軒丸瓦の同范関係(報告書より)

そらく、寺院建立にかかる時間が長かったため、製作者が徐々に交代していったのだと思います。古い段階のものは分厚い傾向があり、新しいものは薄くなっているようです。また、新しいものの中には、カキ目と呼ばれる板状具でなでつけた調整が加わっています。A系統の平瓦は3種類程度に分類されますが、交代の度に製作技術まで変化することはなく、末松廃寺独特の製作技法を守り続けました。

(3) 末松廃寺系瓦の伝播

末松廃寺系軒瓦は、加賀市弓波廃寺に伝播しています。弓波廃寺では、A系統で細い弁の軒丸瓦が伝わっています。平瓦もA系統の古いものが伝わっています。その他、富山県などいくつかの遺跡でA系統平瓦とよく似た平瓦が確認されていますから、各地に伝播した可能性があります。加賀で最古の瓦ですから、末松廃寺のA系統の瓦屋は、中核的な役割を果たしたと考えられます。

また、西井龍儀氏の研究によると、末松廃寺系の塔心礎が、加賀市弓波廃寺や若狭・能登・越中に伝播しています。弓波廃寺は軒丸瓦・平瓦も末松廃寺系ですから、よほど関係が深かったのだと思います。その他の寺院では、瓦と心礎は無関係のようですから、瓦を造る人と心礎を造る人は別々だったと思われます。

古代寺院を建立するには、今までにはなかった最先端の技術が必要になってきますから、各地の豪族は協力しあって寺院を建立したと思われます。末松廃寺系技術が各地に伝播したのは、そのためでしょう。末松廃寺を建立した氏族が、最先端の技術を各地の豪族に提供したのだと思います。

古代寺院の伽藍が完成させるには、何十年もかかるのが普通です。飛鳥寺は短期間で造られていますが、山田寺などは政争に巻き込まれたこともあります。30年以上かかっています。一般的には、最初に金堂を建立し、次に塔・講堂という順番に造ったようです。ですから、金堂の瓦を造る時期と、塔の心礎を造る時期は、時間差があったはずですが、弓波廃寺と末松廃寺は伽藍配置・軒丸瓦・平瓦・塔心礎が共通しますから、よほど長い間、深い関係にあったのでしょう。

(4) 末松廃寺 A 系統瓦屋の問題

A 系統の太い弁の軒丸瓦の範型は、最初から傷がついています。範型を彫り込んだ時についた傷かもしれませんが、もしかすると、末松廃寺建立以前にも瓦を造っていた可能性があります。そう考えると、次のような想定もできます。

(想定1) 最初は細い弁の軒丸瓦で別寺院の瓦を作っていたが、その後で末松廃寺の瓦を作りはじめた。その際、瓦の規格を小さくして文様を縮めたため、太い弁の文様できた。以前から使用していた細い弁の軒丸瓦も若干は作り続けたが、この範型を使用していた際作者はほどなく末松廃寺から撤退し、弓波廃寺の造営に協力した。弓波廃寺でも瓦の規格が異なるため、細い弁を見本にして新たに範型を製作した。太い弁の軒丸瓦を使用していた製作者は最後まで末松廃寺金堂の造営に協力し、無事金堂を建立した。

また、湯屋窯の軒丸瓦は急激に範型が痛んでおり、その間にも別の瓦を造っていた余地があります。単に保管の状態が悪かっただけかもしれませんが、小松市千代遺跡の発見でわかったように、周辺には未発見の寺院がまだまだあるのだと思います。とすれば、次の想定も可能です。

(想定2) 末松廃寺金堂を建立後、塔の建立、もしくは別寺院の建立や補修のため、再び末松廃寺金堂と同じ範型を使用した。そのため、範型は著しくあれて痛んだ。痛み具合からすれば、かなり多量の生産を行ったか、あるいは保管状態が著しく悪かったと想定される。

別寺院があったとすれば、それは末松廃寺建立以前の最初の寺院であった可能性も高く、もしそうだとすれば、能美古墳群のお膝元で造営されていたのではないかと想像しています。

ただし、従来、末松廃寺は道君一族が勢力圏を拡大していったモニュメントとして理解されてきました。後の加賀郡の有力者として文献史料にも度々現れる道君氏の動向は確かに無視できません。道君説が正しいとするならば、将来的に金沢市北部で末松廃寺系の最古の瓦が発見されることでしょう。能美古墳群説が正しいとするならば、能美市から小松市にかけてのいずれかの地点で発見されるでしょう。現在のところ、いずれの地域も古代寺院の調査や発見が十分ではありません。将来の発見に期待したいと思います。

4. 開発と仏教一手取川扇状地と末松廃寺一

全国の古代寺院を見たとき、大きく分けると二つのパターンがあります。ひとつは古墳時代から連綿と有力な古墳を作り続け、それが白鳳時代になると引き続き古代寺院の建立へとスムーズに移行する地域です。古墳時代以来の開発を順調に発展させた地域だと言えるでしょう。加賀市の白鳳寺院はまさしくその好例です。七尾市でも寺院建立直前の古墳と古代寺院が近接しています。巨大な能美古墳群の周辺には古代寺院が確認されていませんが、おそらく、小松市十九堂山遺跡や千代遺跡周辺に古代寺院が造られたのだと思います。こうしたあり方が、北

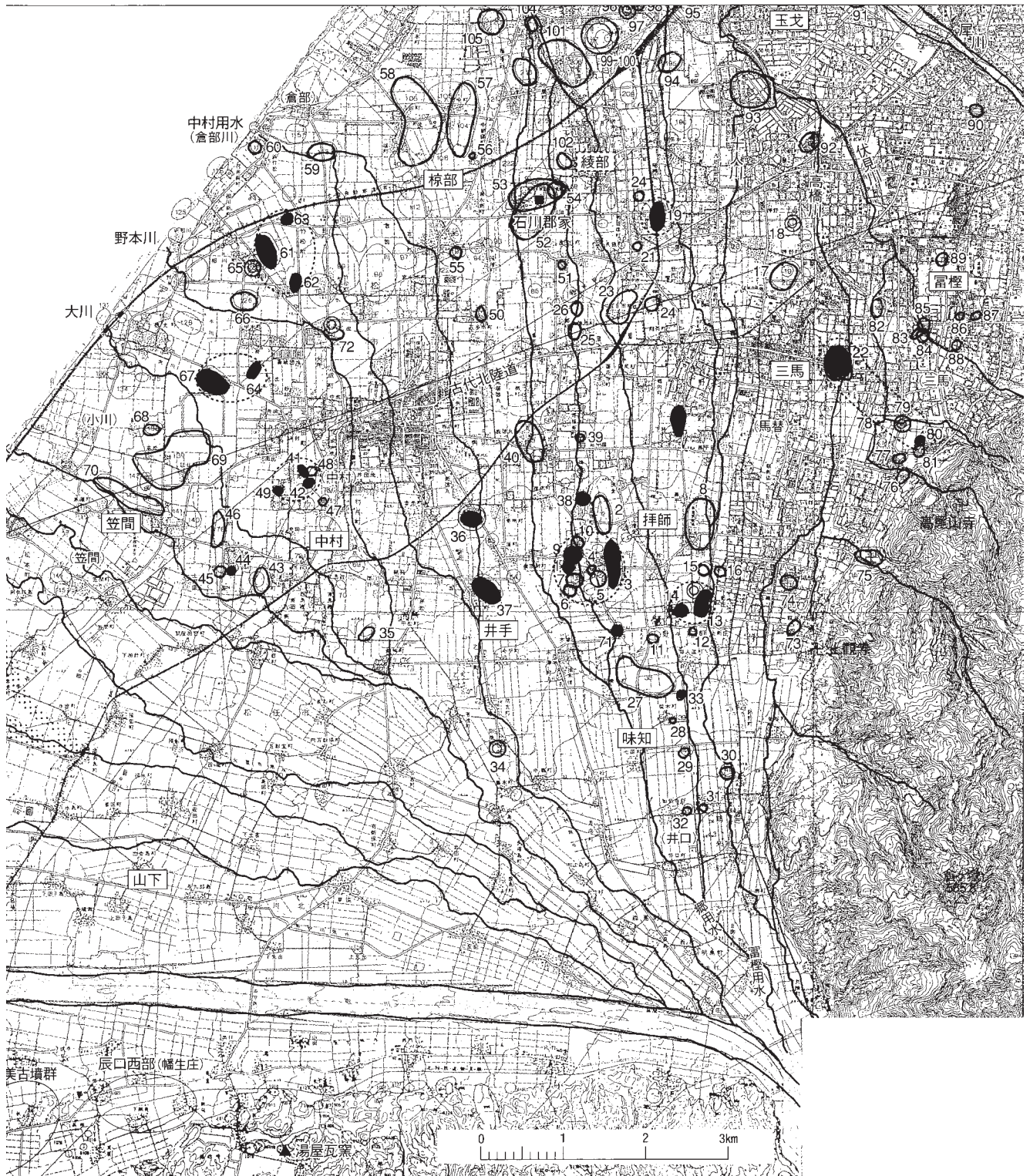


図5 末松廃寺周辺の古代遺跡（黒丸は7世紀を含む集落、白丸は8～11世紀の集落。報告書より）

陸の他の地域でも一般的です。

これと違うパターンは、古墳時代には遺跡数が少なかったのに、古代寺院建立後、周囲の開発が発展して遺跡数が著しく増加するパターンです。おそらく、古墳時代に十分に開発されていなかった空闲地を大規模に開発したのでしょう。古代寺院建立が新規開発のシンボルになったパターンです。

表2 末松廃寺周辺の遺跡群の動態（末松廃寺報告書より）

		I 期	II 期 ~ III 期				IV 期	V 期	VI 期	VII 期
			II 1	II 2	II 3	III				
末松遺跡群	木津遺跡									
	末松 A 遺跡									
	末松 B 遺跡									
	末松ダイカン遺跡									
	末松廃寺（遺跡）									
	末松福正寺遺跡									
上林新庄遺跡群	南地区	上林新庄遺跡								
		上林テラダ遺跡								
		上林ニシウラ遺跡								
	北地区	下新庄タナカダ遺跡								
		下新庄アラチ遺跡								

末松廃寺の周辺は7世紀始め頃から遺跡が確認されていますが、本格的に遺跡数が増加するのは寺院建立後の7世紀末以降のことでした。巨大な手取川扇状地の開発は困難なため、小規模な開発しかなされていませんでしたが、末松廃寺建立後は周辺地域の景観を一変させました。末松遺跡群（木津遺跡・末松 A 遺跡・末松ダイカン遺跡・末松福正寺遺跡）や上林新庄遺跡群（上林新庄遺跡・上林ニシウラ遺跡・下新庄ナカタダ遺跡・下新庄アラチ遺跡）はいずれも、末松廃寺創建を境にしてそれ以後に発展するか、あるいはそれ以後に始まります。末松廃寺は、末松・上林新庄地区一体の開発の「さきがけ」であり、おそらくはそのシンボルだったのでしょう。

手取川扇状地のような、広大な扇状地を開発するには計画性と規模の大きな協力体制が必要だったはずですが、おそらく、末松廃寺周辺の開発は、古墳時代以来の政治的慣習を振り払い、新たな政治的決断によって実行されたものでしょう。このような形の古代寺院は、北陸の中では決して多くはありませんが、全国的には一定の割合で確認されます。畑中英二氏の研究によれば、滋賀県ではこうしたパターンの古代寺院が多いようです。倭政権の政策に基づく全国的な情勢だったと考えられます。

5. その後の末松廃寺と仏教

末松廃寺の衰退

威厳を備えた末松廃寺の金堂も、瓦の補修が十分になされないまま、奈良時代後半から平安時代のうちには急速に衰微したように見えます。おそらく、瓦葺きの荘厳でお堂が飾られた日々は、そう長くはなかったのだと思われます。50年程度は保っていた可能性がありますが、100年保てなかったことは確かでしょう。しかし、金堂倒壊後、以前の金堂に比べれば小さくなっていますが、一般的な集落の建物からすれば規模の大きな建物が再建されており、寺院として存続したようです。

末松廃寺では湯屋窯の瓦で補修された以外、奈良時代に入ってから瓦は全く補修されてい

ません。各地で建立された白鳳時代の古代寺院は、奈良時代に瓦が痛みはじめると、度々補修されていました。瓦だけを見ると末松廃寺は短命の寺院ということになります。そして、いつの頃が明確ではありませんが、金堂が倒壊し、その跡地に規模を縮小したお堂が再建されます。瓦葺きで荘厳された時期は短かったのですが、「寺」としての役割はそれ以後も連綿と続いていたことがわかります。このように、瓦葺きが早くに廃れながらも、寺院としての機能が続く例は、七尾市国分廃寺などでも確認されています。おそらく、雪が多いことなどを原因とした北陸独自の現象なのでしょう。

仏教の変質とさらなる普及

末松廃寺の瓦葺きが衰微した奈良時代後半から、周辺の山地では山寺と呼びうる小規模な寺院が数多く作られるようになります。金沢市三小牛ハバ遺跡はその中でも大規模なもので、富樫丘陵から能美丘陵にかけての山々にも多くの山寺が作られました。

最近、小松市では7世紀後半に遡る古い山寺が発見されるようになり、山寺が平野の古代寺院とほぼ同じ時期から始まったことが明らかになりつつあります。平野の寺院と山寺はセット関係にあり、僧は平野で布教をしながら定期的に山寺にこもって修行をしていたと考えられています。山寺の発展は僧の修行を示すものとして、古代仏教の普及と発展を示す大切な証拠です。

また、集落遺跡の発掘調査でも仏器関連の遺物や「寺」と書かれた墨書土器などが出土しており、瓦葺き・礎石建ちではない集落内の小規模な寺が発見されはじめています。これも山寺と同じく、8世紀後半以降に顕著になってきます。おそらく、8世紀後半には末松廃寺のような地域のモニュメントになるような立派な建造物ではなく、ややランクは落ちるけれども、宗教施設としての意味をもった小規模な堂が普及したのだと思われます。

山寺や里の寺の発展でわかるように、奈良時代後半以後、末松廃寺の瓦葺き荘厳は廃れましたが、仏教はますます普及しました。末松廃寺の建立にはかなりの資本・労力を投資しなければなりませんでした。そのおかげで、以後の仏教の普及はスムーズに行われたのでしょう。

末松廃寺の造営は、地域の新規開発のモニュメントとしてだけでなく、仏教の普及を広める上でも重要なモニュメントになり、周辺に仏教が普及し、寺院の施設やその荘厳が崩れた後でも、細々と宝灯を守ったのだと思います。

おわりに

真宗王国の基盤

北陸は今も「真宗王国」と呼ばれるほど、浄土真宗の信仰が篤い土地です。蓮如が吉崎で布教したことで急速に浄土真宗が浸透しましたが、その前提として仏教信仰に篤い地域性があったことも間違いのないでしょう。実際に、蓮如以前には能登総持寺や越前永平寺など、曹洞宗の重要な寺院も建立されていました。

末松廃寺の建立は、その後の仏教王国・北陸を形作る大切な第一歩だったと思われます。今回、末松廃寺の発掘調査報告書がまとめられ、末松廃寺の建立を境にして周囲の古代遺跡の開発が進められたことが明らかになりました。倭の社会にとって、こうした開発は「古代の文明開化」の一環だったと考えられます。

開発困難であった「野」の地域を拓き、文明を吹き込んだ最初のモニュメントとして、末松

廃寺は建立されました。そして、その後の紆余曲折の歴史が北陸をいつしか真宗王国に育てあげました。

「野々市町」の基盤

現在の地図を見ると巨大な金沢市と白山市に挟まれ、石川郡野々市町が埋没しそうに見えます。この地域が受けた歴史的経験はさまざまなものでしたが、末松廃寺の建立と廃絶は、「野々市」という土地の性格を決定づけているようにも思います。末松廃寺や周囲の古代遺跡による開発がなければ、かつての富奥村も現在の野々市町も成り立たなかったでしょう。その意味で末松廃寺が果たした歴史的役割は、現在の野々市町の姿につながっていると思います。

野々市町を含んだ周囲の開発にとって、欠くことのできない重要な遺跡のひとつとして、末松廃寺を今後とも検証して行っていただきたいと思います。末松廃寺や周辺の古代遺跡には、まだまだ明らかになっていない謎がたくさん残っています。それらを検討しつづけることは、将来の野々市町の姿を考える、参考になるのではないのでしょうか。